

講談会に参加して

国際日本学部 国際文化交流学科 観光文化コース2年 島川・プレゼミ
山田尚汰

私たちは島川プレゼミナール・ゼミナールの活動の1つとして、「講談」に参加させていただきました。私たちは、観光におけるエンターテインメント性のある新しいガイディング手法について研究しており、今回は語りかけることのプロの所作を、日本の伝統文化を見て学びに行きました。今回、山手線御徒町から徒歩3分のところにある、「お江戸上野広小路亭」の講談会に参加させていただきました。

私は日本の伝統文化の1つである「講談」を今回参加させていただくまではその存在をまったく知りませんでした。先生から勧められても、イメージとして落語に近いものではないかと考えていました。しかし、講談と落語は大きく違いました。落語は「演じる」ということを重視しているのに対し、講談はしゃべりをメインとし、「テンポ」を大切にしています。ではこれから実際に講談をみて発見、感じたことを2つ紹介していきたいと思います。

1つ目は、現代の時事ネタを取り入れていることです。講談や落語という昔のお話という印象を持っていました。昔の話の中に理解しやすい、面白くするために、現代の時事ネタを取り入れることで若い世代にもわかりやすい、聞きやすい内

容にしていることが大変印象的でした。また、物語に入る前のお話でも現代の時事ネタを取り入れることで、聴衆の心を掴み物語を聞きやすい環境を作っていたのが大変印象的でした。

2つ目は、話の間の取り方、テンポです。今回私たちの一番の目的は、講談師がどのように話をしていくかというのを見に行くことであり、私は特に話し方に着目して講談を見ていました。講談は物語を「読む」というのですが、「朗読」とは違い、講談師が面白く、わかりやすく聴衆に聞かせることで物語を理解してもらうことであると考えます。では、どのようにして面白く、わかりやすく物語を伝えていくかと考えた際に、話し方や話す時のテンポが大切であると考えます。つまり、ただ物語を朗読するのではなく、聴衆一人ひとりとコミュニケーションをとっているように感じました。話の中で話すスピードを意識し、音の強弱をつけることで、聴衆がまるで物語の中にいるようなイメージができます。講談は、テレビなどとは違い、視覚による情報はなく、主に聴覚だけで物語の想像をするため、難しいかと思われます。しかし、実際初めて講談を聞いた自分でも簡単に物語を想像することができました。これらはやはり「話す力」があるからこそだと思っています。

私は今回の講談会に参加させていただいて、自分の知らなかったものを知ることができた機会でした。私自身喋りが上手くなるために、滑舌を良くし、聞こえる声で話すことが大切であると考えていました。しかし、今回の講談を通し、聴衆に理解してもらうにはお客様と一人ひとりと話すよう意識し、話す際のテンポがとても大切だと知ることができました。そして、私たちがこれから観光と喋りについて考えていく中で、今回の講談はとても大きな刺激を与えてくれたと考えます。そのため、今回の経験を今後の学びに繋げていきたいと思っています。

最後に、読者のみなさんも初めて聞く人でも大変わかりやすく、面白く聞くことができる日本の伝統文化の1つである「講談」を一度体験してみるのはいかがでしょうか。現代に生きる私たち若者にとっても興味深いものであることは間違いないです。大いにおすすめいたします。

